

光の国の某宅配員系文 明監視員になった件

キリエル人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

覚えているだろうか。噛ませになったあの戦士を。マックスギヤラクシーを届けに来た赤と銀の光の配達員。

そう、ウルトラマンゼノンである。

総出演回数2回！戦闘シーン合計約一分20秒！

彼はゼットンとベリアルにことごとくやられた良いとこ無しのサブトラマン界の伝説である。

これは彼を少しでもカッコ良くする為考えられた物語だ。

この作品は前のアカウントで連載していた光の国の某宅配員系文明監視員になった
件のリメイクです。尚内容に関しては前作とは全くの別物となっております。

またウルトラマンマックス本編がウルトラ銀河伝説の後になっています。物語の展
開上の都合です。すみません

目次

始まり	1
公園の中心で怒りを叫んだモノ	6
それぞれの道(前)	16

始まり

M78星雲。光の国。今日この星は今までにないピンチを迎えようとしていた。空からベリアルが降ってきたのだ。タロウ教官を抱えて。

黒い体に禍々しくつり上がった赤い目。あんななりをしていても数万年前は相当ブイブイ言わせてたらしいが真偽は不明である。

タロウ教官がやられているのを見てそれぞれが思い思いに攻撃を撃ち込み始めるが全て返り討ちにされている。

あるものは光弾に吹き飛ばされ、

またあるものは盾にされて味方の攻撃を受け倒れた。

かく言う私はかなり速い段階で大開脚しながら吹き飛ばされた。なぜ私がこんな目にあっているのか。責任者をだせ！



事の始まりは今から7000年と少し前に遡る。当時大学生だった私はふと気がつ

くと、とあるウルトラマンとしてこの世に生を受けていた。何を言ってるか分からないと思うが事実である。

この様な現象が前世では「転生」と呼ばれ、小説などで流行っていたが、神様にあつた覚えもなく得体の知れない凄い力を授かった訳でもなかった。(この身体に転生した事がそれなのかも知れないが)

ただ気がつくくと巨人になっていたのだ。最初こそいきなり異星人になってパニックになったが、必死に時間をかけてこの現実を受け入れてしまったのである。

生まれて数日経った時には流石に気がついた。この世界は「ウルトラシリーズ」の「光の国」であると。

全面鏡張りの様な街並みに赤や銀色の体色をした巨人。気がつかない方がおかしいのだ。

自分に与えられた名前は「ゼノン」だった。悲しいなあ……。あのゼノンである。

皆さんはウルトラマンゼノンについてどれくらい知ってるだろう？初登場はウルトラマックス第13話である。当初児童誌などでマックスと同等以上に強いと言われてたと聞くと聞くとが実際はただの宅配員であつた。

その後本編に出る事は無く、ウルトラ銀河伝説に關してはただの囁ませだった。そ

こー！本編でも嘯ませだつたとか言わないで！

ともかく、転生してしまったからには頑張りたいと思った訳で、ずっと格闘技などに没頭していたので（出来る様になったとは言っていない）同年代の友達はお察しの通りでありました。

しかしそんな私に声をかける男が一人。そう。ウルトラマンマックスである。彼はこう言った。

「胸と尻、どつちが好きだ？」

無論胸である。彼は転生してから衰弱しきっていた私の性欲を復活させた男だ。しかし出会い頭のこれは流石に無い。彼に話しを聴くと

「同族の気配がした」

らしい。頭のネジが数本飛んでると思つてしまつたのも無理からぬことだ。運のいい事に彼とはこれを機に仲良くなって、親友と言える仲になった。

行動力あるムツツリスケベ。身長48メートル。体重3万7000トン。真面目な顔とは裏腹に、結構スケベだぞ。

だが問題はまだあつた。こいつしか友達がいなかつたのである。士官学校に入り、今からでも遅くないと友達100人作ろうと思つたのは良いものの、生まれ持ったくそ渋

ヴォイスと何年も使われることのなかった口ではまともに話す事が出来ず遂に友達ができる事はなかった。

しかし勘違いする事なかれ！みんなとてつも無く良い人なのは確かなのだ。

「良い声だね！」

と褒めてくれたあの子は元気だろうか。それでも結局友達になれなかったのだが。

話を戻そう。私は考えたのだ。このまま嘯ませで良いのか？と。答えは否である。圧倒的否である！

その結果宇宙警備隊に入って薔薇色の、刺激のある人生を送ろうという結論に至った訳だが、これまで打たなくて良い布石を打ちまくってた私にとってそれは高すぎるハードルであった。なにせ宇宙警備隊の仕事には他の星との外交などもあるのだ。

ただでさえ上手く話せないのに数ある星の宇宙語をマスターしなければいけないのだ。他にも未知の惑星で1年間戦い続けられる能力などのよく分からないモノもしばしば。

その時目をつけたのが文明監視員である。ぶつちやけ監視してレポートを提出するだけの簡単な仕事だ。

必死の努力の末、やっと今年、文明監視員になることが正式に決まったのだ。

喜んでた矢先にこれである。舐めてんのか。ベリアルって何よ。マックス本編終わった後にやるもんだと思ってたよ。悲しきかな。だんだん寒くなってきた。死ぬのだろうか。意識が薄れていく。



次に目が覚めたのは全てが解決した後だった。光の国の人々は皆喜んでいるが、私は途方に暮れていた。何も出来ずに吹き飛ばされたのだ。しかも開脚しながら。大開脚しながら。もうこんなのはこりこりである。こんな無様な姿をこれ以上見せるわけにはいかない。

そう覚悟をしたのは良いものの、何もしない間に数ヶ月があっ！と言う間に経ち、私のファーストミッションが始まってしまった。

内容は腐れ縁のウルトラマンマックスが何やら問題を起こしたらしい。サポートに回れとの事だ。何やってんだあいつ…。正直なぜ私がこの仕事をやらなければいけないのか疑問ではあるが、地球に向かって飛び立つのであった。

横にいたおっちゃんに白い目で見られる。なんとなく居づらくなって足早にそこを後にした。



翌日の話である。昨日の公園に行くのも少し気が引けるし、なんとなく街をぶらついている。もう秋になると言うのに、外はちっとも涼しくなる気配はない。

涼しさを求めて海の近くまで来た。そこで一番目立っているのはやはりUDF【地球防衛連合】の精鋭チーム、DASHの基地だ。彼らはこの星で怪獣と戦っている組織であり、そこにマックスが合体した人間も所属していた筈である。確かトウマカイトといっただろうか。なにしろ遠い昔の記憶なので殆ど覚えていないのだ。今では前世の記憶は知識として少し覚えてる程度で、生前自分がどんな事を考えていたか、どんな職に就こうとしていたかは殆ど覚えていない。

話が逸れた。海を見て思考に没頭していた私の前を一人の女性が通っていったのだ。オシャレでシックな若い人だ。浴衣を着ているが今日は祭りでもあるのだろうか？ふと目で追つてくと、彼女はDASHの応接室がある建物へ入っていった。ふむ、物語に関係する人物だろうか。

まあ、私には関係ないんだけどね。

ストーリーとか関わらないでも怪獣倒せばいいだけだし、ヘーキヘーキ。

そんな楽観的な思考をしている私の耳に声が入って来た。超人的な聴覚を持っているがゆえに聞こえてしまったのである。

『ウルトラマンゼノンが殺されるんです』

!!??

翹いで光の姿になり進入、声の発信源から部屋を特定。目立つとアレなので通気口から様子を伺う。ここまで1秒もたつてない。いま人生で最速の動きだったと思う。

『ゼノン……?』

『ゼノンって誰だよ……』

ほら、隊員の皆も困惑してるじゃないか。名前間違えはいけないなあ。

『マックスじゃないの?』

そうだよ。ナイスだ!女隊員!君の名前わからんけど!

『ゼノンと言っていました。宇宙からゼットン怪獣が送り込まれてくるって』

ワーオ！聞き間違いじゃなかった…。もう許せるぞオイ！飽くまで神妙な面持ちで、マジトーンで彼女は言うのだ。なんでこんな事になったんだ…

『でも、誰がそんな事言ったの？』

白衣を着たおば：ゲフンゲフン！お姉さんが聞いたです。

『私の父、ゼットン星人です』

「この人頭おかしい…」

ついつい小声で言ってしまった。いや、疲れてるだけさ。きつと何かの間違いだ（超楽観的観測）めげないしよげないドラゲナイだ。取り敢えず家に帰ろう。うん。

家、無いんだった。



結局また街をぶらついてる訳だが、つい先ほどゼットン星人からテレパシーがあった。内容はこうだ。

『間も無くゼットン怪獣が地球に降り立つ。積年の恨みを晴らす時が来た。首を洗って

まで』

積年の恨みってなんなんですかねえ…。？疑問はあるがまずは家探しが先である。しかし金がない。

だが悲しむ事なかれ！家探しは3秒で終了したのである。途方に暮れているとちよ
うど良さげな廃工場があつたので借りさせてもらう事にする。

まずは地下にいい感じのスペースをつくり、廃材でそこに秘密基地を作らせてもらつた。少し深いところに作ったので、バレることはまずないだろう。だが素材が素材なので強度はお察しである。しかしこの材料で作ったにしては立派なもので、少し気に入つた。

その直後である。大きな地響きがなり秘密基地が全壊した。慌てて地上に出て地震の発生源を見る。聳え立つソレは火球を繰り出し町を蹂躪していく。おそらくあれがゼットン怪獣だろう。

ウルトラマンの姿へ戻ろうとしたその瞬間、火球がこちらに向かって放たれた。大きな爆発とともに廃工場が完全に壊される。もう許さねえからなあ？

今度こそと変身しようとした瞬間、街が赤い光に包まれた。ウルトラマンマックスの登場である。マックスはゼットンに対して攻撃を繰り出していく。パンチ、キック、手刀。しかしそのどれもがその黒い装甲により跳ね返される。相手の攻撃が自分に効か

ないことを確認したゼットンは、嘲笑うように鳴いた。それに呼応するかのように、顔と胸にある発光体は不気味に輝く。

それならばと使われたマクシウムソードによる攻撃もゼットンシヤッターで防がれる。なるほどゼットン星人が自慢する程のことはある…。あるのだが…。なんと言うか、こう、しなびている。

ずんぐりむつくりの体型にフニャつとしたツノ。少しばかり薄くなっている体色。どれを取っても弱そうなのである。強いけど弱そうだった（小並感）

最後の手段だと放たれた、今まで何体もの怪獣を葬った正真正銘の必殺技、マクシウムカノンもついにはヒビを入れることしかできなかつた。

これは流石にまずい展開になって来た。急いで元の姿へと変身する。怪獣に手を向け指を折りたたんでいく。人差し指から順に、中指、薬指、小指……。そして親指。グツと拳を握り締めると、体が赤い光に包まれる。そして、徐々に体が巨大化し、ウルトラマンゼノンへと変身を遂げた。

そう、スク○イドである。カ○マである。だってカツコいいじゃん。前世で好きだったけどこの世界にもあつて安心した。

「ゼアアアア」

お馴染みの渋ボイスで爽快に登場。そのまま一気にゼノニウムカノンを照射。狙い

は今マックスがヒビを割ったところだ。光線は一気にゼットンシッターを破り直撃。ゼットンは吹き飛ばされ起き上がれなくなっている。

案外あつけなくシッターが破れ拍子抜けしたが、すぐにマックスにエネルギーを分け与える。

『無事か?』

『あ、ああ。君はウルトラマンゼノン…?』

『話は後で。どうやら奴さんはお怒りのようだ』

「ぶもおおおおーゼットウオオオオン」

逆上した様子でゼットンは突進してくる。光の刃を飛ばし牽制してみるがゼットンシッターは復活しているらしく攻撃が届かない。

こんな時のためにゼノンギヤラクシー(仮)をいつでも出せるようにしておいたのだ。すぐさまゼノンギヤラクシー(仮)を展開、今回の私は宅配員などではない! やっぱり、私も主人公なんです…

その時不思議な事が起こった!

なんとゼットンが急速に加速。ゼノンに向かってすてみタックル(威力120命中100)を喰らわせたのである!

きゆうしよにあたった。

ゼノンは怯んでわざがだせない！

本来ならすてみタツクルにそんな効果は無いのだが、それはまあいいだろう。

油断したところにあたった一撃はゼノンを大きく吹き飛ばし、ゼノンの手に嵌るところだったゼノン（以下略）はなんとマックスの手にスッポリと嵌った。この瞬間、ゼノンギヤラクシーはマックスギヤラクシーへと昇華したのである。

あれえ!? People!? なんぞこうなるのお!?

『それを使え！私は奴を引き止めておく！』

それを聞くとすぐにマックスはエネルギーのチャージを開始。マックスギヤラクシーは金色に輝いている。ゼットンがその莫大なエネルギーに気がつき、攻撃を仕掛けようとするがすかさず蹴りを入れる。

『お前の相手は私だ』

手をクイクイと振り挑発する。奴はすぐに逆上しリアアットをかけてこようとした。それをかわし後ろから右ストレートを当てる。奴の体勢は崩れる事なくまた太い腕を大きく振るい攻撃してくる。

反応できずに食らってしまい吹っ飛ばされてしまった。立ち上がろうとするも先ほどの攻撃をもろにくらったせいでバランスが取れない。頭がぐわんぐわんする。

これ幸いとばかりにゼットンが火球を連射してきた。慌てて回避しながらエネルギーの刃を撃ち込む。ゼットンシッターを展開する事でそれは塞がれてしまう。だが本命はこれじゃない。

『今だ！やれ！』

「ハアアアアア！」

ゼットンは見事に粉碎された。それはもう跡形もなく。

マックスギヤラクシーが光に包まれ消える。異空間にしまったのだろう。それを確認するとマックスに向かってテレパシーを飛ばした。

『ウルトラマンゼノン』

『光の国からサポートに来た。今地球に正体不明の戦闘機が迫っている。敵は4機。これから宜しく頼む』

『ああ、君がいれば心強い。ありがとう』

変身を解き街に降り立つ。光のエネルギーに包まれターミネーターポーズで佇む。住む場所どうしようか。にしても深夜の街は意外と寒いな。暑いのか寒いのかはつきりしてほしい。頼むぜ。

しかしやばい。久しぶりに元の姿に戻ったせいかな負担が大きすぎる。調子乗って内臓まで再現したせいで飯を食わなきゃダメなのだ。光を吸収することで最低限のエネルギー

ルギーは確保できているが、やはり負担が大きかった。体の節々が痛む。しかも尋常じゃないほど眠い。

睡魔に襲われ結局その日はそのまま廃工場跡地で寝た。

それぞれ道（前）

目が覚めたら知らない天井がそこにあつた。部屋は4畳半程で、隅々まで綺麗に掃除されている。部屋を見回しているとノックの音が聞こえて来た。返事をする前に扉が開かれ、そこから出て来たのはなんと美しい女性。彼女はこう言う。

「あーもう起きた「起きたか、にいちゃん！」

もちろんそんな出来事はない。覚醒した瞬間全てを悟つた。上記は全て夢の中の話であつた。もちろんこんなうまい話、ドラマくらいでしか起こり得ないのである。7000年も生きてると言うのにこんな夢でドキがムネムネしてる自分が恥ずかしい。

しかし、となると私に声をかけた人物は誰だろうか。声色からして男であることは明白。恐る恐る目を開けてみると、そこにはいつぞやのおつちゃんかいた。

「こんなところで話すのもなんだ。ちよつとついてこい」

「え、ええ。しかし、どこへ？」

「ついてからのお楽しみだ。ほれ、早くしないと置いてくぞ」

そう言つて彼は早々と歩き出してしまった。

「ちよ、ちよつとまつてくさいよ！」

改めて彼の風貌を見してみる。おそらく50代前半で、髪はどこどころ、と言っても7割くらいは白くなっている。顎には無精髭が生え散らかつており、どこか貫禄のある顔をしている。

「いやあ、びっくりびっくり。怪獣が倒されてたんで、街に戻ったら君があそこでぶつ倒れてたんだもの。すぐわかったね。あん時叫んでたにいちやんだって」

彼は無精髭を撫でながらそう言った。どこか安心した表情を浮かべて、また歩き出す。

「いやー、お恥ずかしい」

「いいってことよ。困った時はお互いさま。ストレスとか溜まって全部投げ出したい時くらい誰だってあるさ」

おっちゃんあん。私はあなたの様な地球人に会えてよかったよ。これが温もりと言うやつだ。

「おい、何ぼうつとしてんだ？ ついたぞ」

彼が指差した先には森。秋だと言うのにクソ暑くて、紅葉もなく、風情もへったくれもない。

「いや、ちよつとーここに入るんですか!？」

おっちゃんは当たり前だと言わんばかりの表情で頷いた。

「どう考えてもおかしいでしょ！なんで男二人でこんなところ入るんですか！蚊だつて出ますし蒸し暑いですよ！」

「おめえさん、何勘違いしてるんだ？早く行くぞ」

そう言つて彼は森の奥に入つていく。ええい！ままよ！全軍突撃！一步も引くな！森に入ろうとすると、奥から走つて来た痩せ型の男にぶつかつてしまう。

彼は一言謝罪をすると、足早に立ち去つていった。手には大事そうに何かをもつて。

「おい！待て、中野！」

それにつき、慌てた様子でおつちゃんもでてる。

「あ、あの、どうかしました？」

何を聞いてるんだ私は。どうかしたかも何もどうかしないところならぬ。

彼の顔を恐る恐るのぞいてみると、これまた無精髭を撫で始める。

「ここで話すことじゃない、入れ」

そう言つておつちゃんも森に入つていく。それに続いて入つていくと、中は意外とひらけていて、いくつかのテントが立っていた。

「これ……」

「怪物が現れる前、作つたのさ」

彼はポツポツと話し始めた。

「そんな時は人も沢山いてよ。皆んなで協力して食いつないでたんだ。幸せも喜びも分かち合つて、それこそ家族みたいに。そんな時だ、奴ら怪獣が現れたのは。それでも俺らは繋がっていた。協力して乗り越えようって、皆んなで食料を持ち寄りしてな。でもある時、死んだ奴が出た」

「そんな…」

「そつからだ。そつからやつと気がついた。自分達は死と隣り合わせなんだとな。それでみんな怖気付いたんだ。そうしてる間にもまた俺たちの中から犠牲者がでた」

「すまねえ…… お前さんに話すことじゃ無いな」

「大丈夫ですよ。話せば少しは楽になるだろうし」

「ああ…… ありがとう……」



それからもう早いもんよ。喧嘩なんか日常茶飯事さ。

「待ってくれ田村！ここはみんなで作った場所じゃ無いか！なあ！」

「いいや！我慢の限界だ！こんなとこに居たらおつちんじまう！下がるとこまで下がったが、ここで死ぬ気はない！」

「すまない、おっちゃん…俺も…」

あの時の友情はなんだったのかって思うほどにひどいもんだった。若い奴から歳をとった奴。沢山いたがどんどんみんなここを出て行って、最後に残った中野も行った。まった。



「まあ、それが普通なんだがよ。俺はなんだか、みんなの思い出が詰まったここを離れたくなくてよ…けどみんな出て行っちゃったし…正直死ぬのは怖いんだ…」

彼は涙をこらえながら乾いた笑いをこぼす。その表情は一見余裕そうだが、まるで少しでも触ると崩れ落ちてしまいそうな…そんな表情をしていた。

そうだ。こんなに怪物に襲われているのに安心してる方がおかしいのだ。なぜこんな事に気がつかなかった？なぜこの街の人々は…ウルトラマンやDASHがいると言ってもおかしい。

「なあ、よかったrポオン！」

彼の言葉と私の思考は大きな音に遮られた。急いで外に出てみると、街の人はみな一

点を見てる。つられて空を見ると、そこには「キングジョー」という文字が煙で描かれていた。

「なんだなんだ！こんな時間から花火か？」

「すみません、少し行つて来ます」

「？行かつてどこへ？」

最後まで聞く前に走り出す。後ろから制止の声が聞こえるが、怪獣が行動を起こした。すみませんと一言叫び街へ繰り出した。